

# 西南学院大学構内の戦争遺跡

— 戦時下の松脂採取痕跡を中心に —

伊藤 慎 二

## I. アジア太平洋戦争期の西南学院と戦争遺跡

戦後72年が経過した。日本帝国期の戦争経験者はわずかになった。多くの世代は戦時中の日常体験や空気感をほぼ忘却している。そして、「歴史修正主義」(historical revisionism)に基づく戦争加害に関する史実歪曲・抹消・美化が、現在歴史学界が直面する世界的問題になった<sup>1)</sup>。戦後誕生した日本国は、国民主権・基本的人権の尊重・平和主義を基本理念とする。その維持発展のための戦争経験の継承は、いま新たなカタチがもとめられている。

アジア太平洋戦争期の西南学院は、軍国主義体制からの圧力と自発的な忖度(vorausseilender Gehorsam: 先回り服従)によって、学院独自の自由な気風と教育を失った<sup>2)</sup>。学院創立・運営に貢献したアメリカ人宣教師らの国外退去にも異を唱えることができなかった。それらの結果、西南学院は、日本帝国政府の戦争末期の不合理な学徒出陣政策を拒絶できず、ついに多数の学生を国内外各地の戦地に送り出し、その多くの生命を失った。西南学院にとって、恒久的に歴史的教訓をくみ取る必要のある非常に重要で深刻な一時期である(松見ほか 2016)。

現在の西南学院大学構内で戦前からそのまま残っている建築物は、西南学院大学博物館として現在使用されている当時の本館・講堂程度である。戦時中の痕跡はほとんど現存しないと、一般的には考えられていた。ところが近年、戦争直後の西南学院高等学校卒業生松井靖之氏と九州大学元助教井上晋氏

により、構内の松林に文字通り戦争当時の傷跡が完全に癒えずに残り続けていることが紹介された（松井 2014・2015=図1 中下段、西南学院大学広報課 2014=図1 上段、森下 2017）。そこで、本論では、近現代考古学の観点から、戦時下の松脂採取痕跡を中心に西南学院大学構内の戦争遺跡（遺構・遺物）の現存状況に関する調査研究成果を報告する。



「松根油」採取  
松林の保存を  
松井 靖之 記

西南学院大学（福岡市早良区）のチャペル前の中庭に愛護の松の太木が並ぶ。かつての百道松原の名残でもある。一本のクロマツで保存樹の標識がある。幹を削った大きな傷痕が痛ましい。そこで油分の多い松根油に目を向け、松林とともに採集運動を展開した。

学級運動で中学1年の時、教友と松の根っこ掘りに汗を流した。腰コの時の方では根っこ掘りもなかった。力持ちの大相撲の力士が活躍したという。

今の平和を詠めた保存樹は平和のシンボル樹として、一本の100本の松の本とともに残したいなあ。その時の「パイオネア」はエンジンパイプが枯れるなど、うまくいかなかったのが多かった（中下段）。

松の太木枯死  
シンボル樹に  
松井 靖之 記

麻生刻む「愛護の木」が枯死して、第一の役目を終えた。西博学院大（福岡市）チャペル前の松の木。幹に採取のため、人々で削った傷痕がある。かつての百道松原。埋め立てなどの環境変化や松くい虫の被害と想う。戦争末期、輸入に頼る石油が乏しく、戦闘機などの代替燃料に松や杉の皮を煮た「松根油」採取が奨励された。

この松原は国民的総動員「ザエさん」の民衆用貯蔵所「アイデア」を築った地でもある。学園都市と行き交う学生を見守った樹たけの松がたなくさんある。第一の役割として、枯れても平和のシンボル樹として保存してほしい。東日本大震災の「一本松」のように、生きた教材として役割を願う。

食べる物、着る物、履く物も乏しく、はたして通学した子どもたち、戦争の遺構が風化しないように祈る（福岡市中央区）。

図1 松井靖之氏による構内の松脂採取松現存に関する最初の指摘

出典：上段（西南学院大学広報課 2014）、中下段（松井 2014・2015）

## II. 「全体主義景観」の構成要素：戦争遺跡の定義と分類

考古学における戦争遺跡の研究は、1945（昭和20）年の沖縄戦の戦争遺跡「ガマ」（洞窟壕）における住民犠牲実態の解明に関する考古学的調査方法の有効性模索からはじまった（当真 1984・2015, 伊藤 1986・1989）。近現代考古学の対象としての戦争遺跡は、「近代日本の侵略戦争とその遂行過程で、戦闘や事件の加害・被害・反戦抵抗に関わって国内国外で形成され、かつ現在に残された構造物・遺構や跡地のこと」（十菱・菊池編 2002：1頁）と定義されている。そして、非埋没・埋没状態にかかわらず、戦争遺跡は以下の8種類に区別されている。①政治・行政関係、②軍事・防衛関係、③生産関係、④戦闘地・戦闘関係、⑤居住地関係、⑥埋葬関係、⑦交通関係、⑧その他である。ただし、これらは、一体の遺跡の中で明確に分離区別することが難しい例も含まれる（十菱・菊池編 2002：16頁）。

ところで、近年欧米でも、日本と同様に第二次世界大戦期前後の戦争遺跡の考古学的研究（Conflict Archaeology, Battlefield Archaeology, Combat Archaeology など）が盛んである。その研究動機の根底には、戦争遺跡個々の特色というよりも、現在の国際社会が普遍的に希求共有する理念である人権侵害の根絶や抑圧的政治体制の拒絶に対する幅広い関心がある。そのため、たとえば20世紀の戦争における各種強制収容所（Myers and Moshenska eds. 2011）や、20世紀後半の米ソ冷戦期の軍事基地や反戦運動の現場（Schofield 2009）、あるいは同時期中南米の独裁政権による市民虐殺・弾圧やそれに対する抵抗運動の現場（Ferlini ed. 2007, Funari, Zarankin and Salerno eds. 2010）などについても、すでに考古学的研究が着手・模索されている。なかでも注目されるのは、Caroline Sturdy Colls氏によるナチス（Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei：NSDAP）ドイツの民族絶滅政策＝ホロコースト（Holocaust）に関する考古学的研究である（Sturdy Colls 2012・2015）。ポーランド共和国のトレブリンカ（Treblinka）絶滅収容所遺跡におけるナチスにより破壊隠蔽工作が行われたガス室跡や遺体焼却土坑などの地下埋蔵遺構のレーダー探査・発掘調査や法

表1 日本帝国期の全体主義景観構成要素としての戦争遺跡分類

種別	おもな該当例	十菱・菊池2002分類
戦闘関連	戦場・要塞・陣地・壕・被災地・墜落地・埋葬地など	④戦闘地・戦場関係, ①軍事・防衛関係, ③埋葬関係, ⑧その他の一部
軍事統制関連	常設的な軍官衙関連施設(陸海軍省・師団・連隊本部・病院・学校・研究所・工場・収容所・慰安所・墓地など), 常設的な軍事基地(飛行場・港・演習場など), 常設的な軍事交通通信施設(鉄道・道路・通信所など)など	①軍事・防衛関係, ⑦交通関係, ③生産関係, ⑥埋葬関係, ⑧その他の一部
思想統制関連	軍国教育関連施設(奉安殿・戦没者祭祀神社・記念碑・軍事教練施設など), 治安維持法関連施設など	⑧その他の一部
経済統制関連	資源統制関連施設・疎開民間工場など	③生産関係

医考古学 (Forensic Archaeology) 的研究が代表的である。そして、絶滅収容所や強制労働収容所などのホロコーストの虐殺現場を取り巻きナチス政権支配下の広域に結びつく時間的・空間的・型式学的に多様な遺跡群 (遺構群・遺物群) の総称としてホロコースト景観 (Holocaust Landscape) という概念を提示し、その全体像を解明するための多層的で多分野横断的な研究手法の総体をホロコーストの諸考古学 (Holocaust Archaeologies) と名づけている (Sturdy Colls 2015: pp.12-13)。

そこで、本論では、この Sturdy Colls 氏が提唱したホロコーストの諸考古学の概念を参考に、日本の戦争遺跡 (遺構・遺物) を日本帝国期の全体主義 (軍国主義) の景観を構成する物質文化要素として再規定し、これまでの戦争遺跡の8細分類を、(1)戦闘関連・(2)軍事統制関連・(3)思想統制関連・(4)経済統制関連の4項目の中位区分に統合する (表1)。これにより、戦争遺跡相互の有機的な関係と、それらが一体となって全体主義体制下の戦争遂行を可能とする景観を形作っていることがより明確になると考えられる。

### Ⅲ. 構内の戦争遺跡（遺構と遺物）

現在、東・中央・西キャンパスに分かれる西南学院大学の校地（福岡県福岡市早良区西新）は、戦前から戦後にかけて逐次隣接地を用地買収拡張した結果である。1917（大正6）年の西新地区購入当初の校地は、現在の東キャンパスの南側部分（現西南クロスプラザ・博物館・大学院周辺）のみで、そこに旧制西南学院中学部（現在の新制中学校1年～高等学校2年課程にほぼ相当）が開設された。その後、1921（大正10）年と1930（昭和5）年に現在の東キャンパス中央部分（現本館・百年館周辺）と中央キャンパス東半分（現南門・4号館付近から東側）が校地となり、現中央キャンパス側に旧制西南学院高等学部（現在の新制高等学校2・3年～新制大学2・3年課程にほぼ相当）が開設された。そして、1944（昭和19）年には、東キャンパスの北側部分（現野球場＝グラウンド・合宿研修所周辺）も校地となり、ほぼ現在の東キャンパスの範囲が確定した（図2～4）。さらに、戦後の1949（昭和24）年と1966（昭和41）年の用地買収の結果、中央キャンパス西半分と西キャンパスが校地となり、現在の西南学院大学の校地がほぼ完成している。アジア太平洋戦争期の全体主義景観の構成要素としての戦争遺跡は、この現在の西南学院大学の東・中央・西キャンパス周辺のすべてにまたがって存在しており、厳密には戦時中の西南学院との関連が不明確な例も一部含まれるが、ここでは一括して検討を行う。そして、現在の西南学院大学構内には、すでに消滅したものや計画段階で実施されなかった例も含めて、(1)戦闘関連・(2)軍事統制関連・(3)思想統制関連・(4)経済統制関連の4項目すべてに関連する戦争遺跡の事例を確認できる（図5）。

#### (1) 戦闘関連

a. 空襲痕跡（消滅）：1945（昭和20）年6月19日～20日のアメリカ軍による軍民を区別しない無差別的な福岡空襲では、数発の焼夷弾が学院内にも着弾している。当時の水町義夫院長宅付近（現中央キャンパス2号館東南端付近：図5 X 1）に着弾した1発は爆発炎上したが、直ちに消し止められた。そのほか

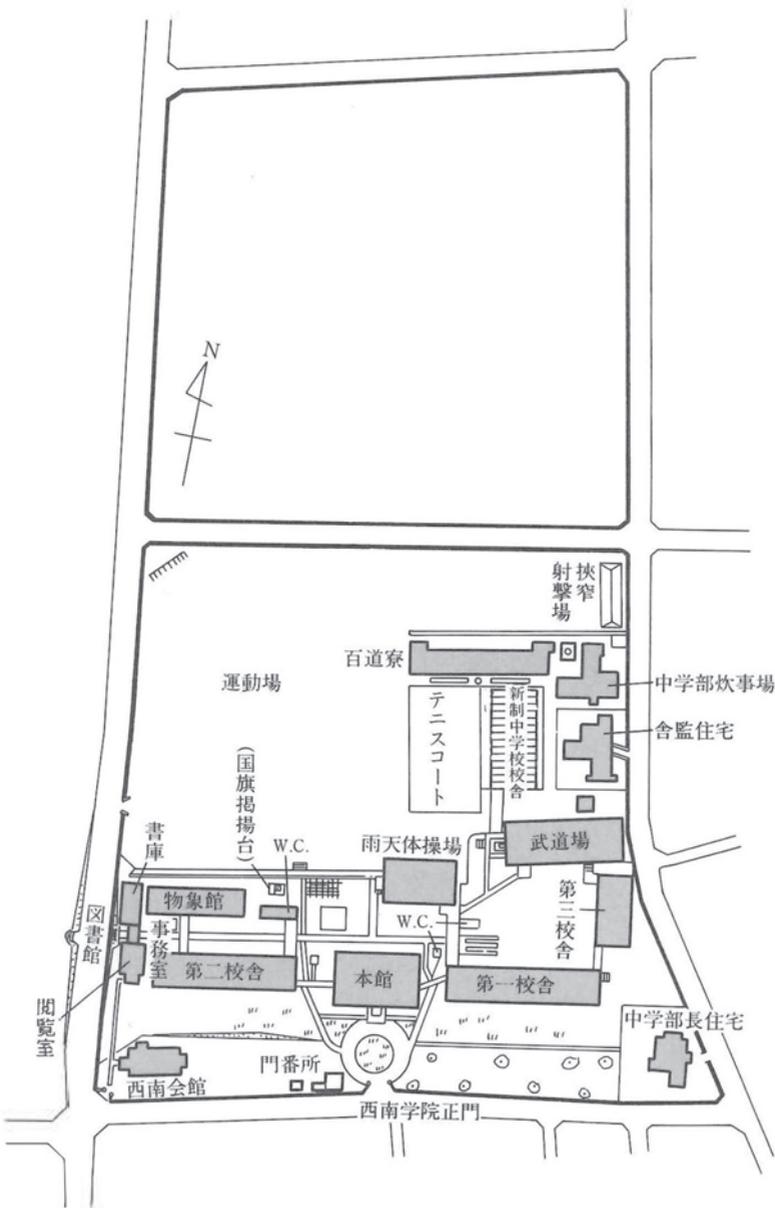


図2 旧制西南学院中学部施設配置図（1948年現在）（現 大学東キャンパス）

※西南学院史資料センター所蔵提供

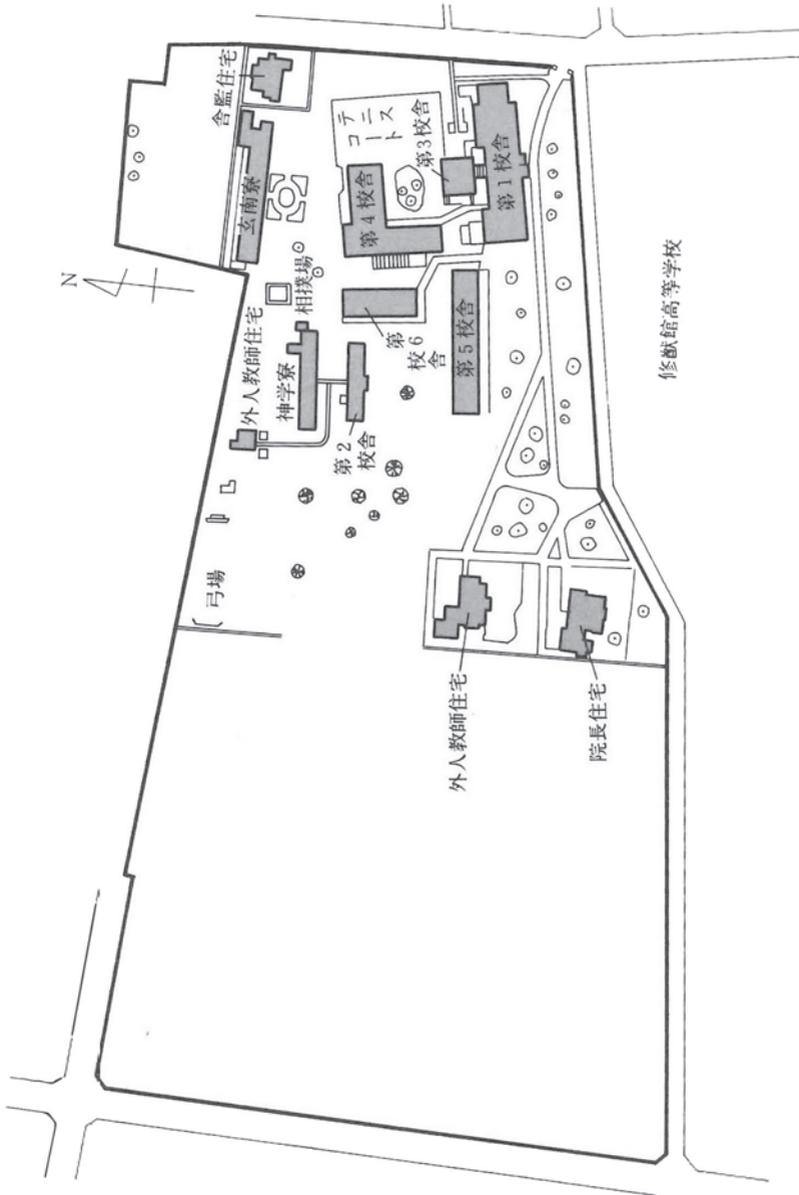


図3 旧制西南学院高等学部施設配置図（1949年3月現在）（現 大学中央キャンパス） ※西南学院史資料センター所蔵提供



図4 1948年11月1日の西南学院周辺の航空写真 ※国土地理院所蔵米軍撮影 USAwide-R423-16  
中央右側：西南学院，中央右下：修猷館高等学校，中央右上：西新小学校，左下：福岡刑務所（治安維持法受刑者等収監）

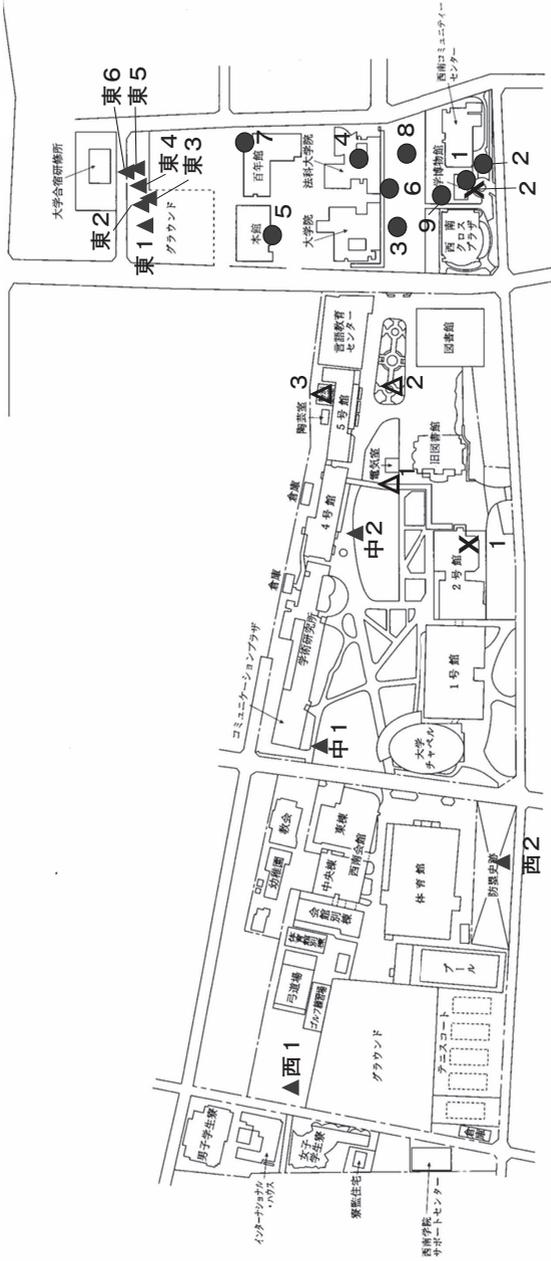


図5 西南学院大学構内の戦争遺跡 ※太字：現存

X 戦闘関連：1 焼夷弾着弾・2 電波欺瞞紙落下、●思想統制関連：1 奉安所・2 奉安殿・3 国旗掲揚台・4 武道場・5 運動場・6 雨天体育場銃器庫・7 狭窄射撃場・8 防空監視所・9 元寇防塁、△経済統制関連：1・2 第二・四校舎転用疎開工場、3 玄南寮転用三菱電機福岡工場建設事務所、▲東1～6・中1・2・西1・2 松脂採取痕跡

は学院内の樹枝が交差する間に落下したが、いずれも爆発を免れた（西南学院史企画委員会編 1986：上巻500頁）。これらの焼夷弾残骸あるいは着弾痕跡などは、現在確認できなかった。そのほかの着弾位置は特定できなかった。なお、この時にアメリカ軍のB29爆撃機がレーダー探知を妨害するために撒いた電波欺瞞紙（Chaff）と考えられる「銀色の紙」が、本館・講堂（現博物館）付近の地上や周囲の樹上に多く落ちていたとされる（内海 2008：71頁）（図5 X 2）。

b. その他：戦時下の学院構内に防空壕が構築された可能性が高いが、存在の有無を含めて明確に確認できなかった。

## (2) 軍事統制関連

a. 軍需工場転用（計画のみ）：1943（昭和18）年に小倉陸軍造兵廠ほか2・3か所から校舎提供打診があったとされる（西南学院史企画委員会編 1986：上巻680頁）。しかし、その後実際に小倉陸軍造兵廠や軍需工場が校舎や校地を利用した記録は確認できなかった。構内に軍事統制関連の戦争遺跡は存在しなかったと考えられる。

b. その他：アジア太平洋戦争期の学院北側に現在よりも間近に広がっていた百道浜<sup>ももちがしま</sup>の浜辺は、厳密には構内ではないが、学院を特徴づける自然景観である。そして、この百道浜からは、博多湾を出入りする艦船や対岸の東区海の中道にある陸軍雁<sup>がんのす</sup>ノ巣飛行場（川口・首藤 2010）方面も一望できたことから、軍事機密保持の目的で、戦時中は厳重な監視対象区域であったとみられる。たとえば、西新地区にゆかりのある漫画家で当時西日本新聞に勤務していた長谷川町子は、博多湾をスケッチ中の1944（昭和19）年にスパイ容疑で憲兵により逮捕・拘留されている（長谷川 1979：29頁）。アメリカ人宣教師とその関係者が多数在職していた西南学院は、その地理的位置も軍部や警察が監視を行う際の要因の一つになったと推測される。

### (3) 思想統制関連

a. 奉安所・奉安殿（一部現存）図5●1・2，図6：日本帝国政府文部省は、1935（昭和10）年に正規の学校として認定した私立を含む全国の学校に対して、国民思想の統合を目的に、現人神としての昭和天皇・皇后の肖像写真「御真影」の自発的受入れ「奉戴」と拝礼を強いた。キリスト教主義の学校である西南学院の理事会は、「御真影」に対する拝礼は宗教的行為ではないという解釈を1936（昭和11）年に決議して、1937（昭和12）年4月22日に本館（現博物館）1階院長室内の金庫室を改装した「奉安所」（図6a）に「御真影」を安置した（西南学院史企画委員会編 1986：上巻417-421頁）。しかしその後、この1階にある「奉安所」に対して、2階講堂への昇降出入りがその真上で行われることが「不敬」にあたる判断したことなどから、募金を徴集して1943（昭和18）年に本館玄関前東側の松林中に神明造の独立した「奉安殿」（図6d）を新たに建設したが、その正確な竣工年月日などは不明である（西南学院史企画委員会編 1986：上巻484-488頁）。

敗戦直後の1945（昭和20）年8月24日に行われた戦後最初の常任理事会の決定で「御真影」は、「奉安殿」から本館院長室に再度移動された。そして、1946（昭和21）年2月に「奉安殿」の廃止と「御真影」の焼却が行われ、同時に軍関係および武道関係書類・軍国主義的諸物品の整理が行われている（西南学院史企画委員会編 1986：下巻13頁）。

「奉安所」であった部屋は、入口扉前の装飾柱・破風が取り払われているが、旧本館・講堂である現在の西南学院大学博物館1階の博物館館長室の倉庫室として現存する（図6c）。室内の大きさは、横幅200cm×奥行144cmである。また、扉部分は、縦幅（＝外壁の厚さ）39.5cm，内側横幅76cm，外側横幅は66.5cmである。現在、扉は戦後新たに替えられた外扉のみであるが、当初は内扉も存在したことが内側に蝶番のみが上下1組残っていることでわかる。対向位置には鍵穴跡と考えられる穿孔が1箇所みられる。ただし、この二重扉の設置が、「奉安所」改装時か学院院長室の金庫室当初のものであるのかは不明である。なお、奉安所入口扉上の装飾破風中央に装着されていた菊花紋章は、



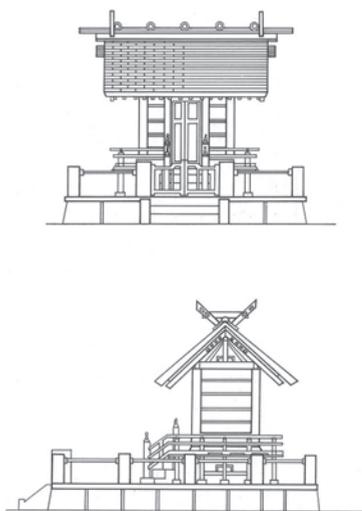
a. 奉安所



b. 菊花紋章



c. 奉安所跡現状



d. 奉安殿（1943年設計図）

図6 奉安所・奉安殿 ※a・b・d 西南学院史資料センター所蔵提供, b・c 筆者撮影

現在西南学院史資料センターが所蔵している。菊花紋章（図6b）は、十六八重表菊紋を浮彫状に半ば立体的に表現し、木製で表面に金塗装を施している。直径18cm・厚さ2.5cmで、裏側に取付固定用の釘状の金具が3本突出している。なお、「奉安殿」が建設されたと推定される場所は、現在の西南コミュニティセンター入口南西側前庭付近であるが、現地表面にはその建築基礎遺構などを確認できなかった。

**b.** 皇紀二千六百年記念国旗掲揚台（消滅）図8a：アジア太平洋戦争期に日本帝国政府が広く使用した神話上の「神武天皇」が即位したとみなす年を元年とする「皇紀」の2600年にあたる1940（昭和15）年に、旧西南学院中学部運動場南縁（現大学院南東側）付近に当初設置されたが、1983（昭和58）年に現在の東キャンパス大学博物館北側付近から東キャンパス野球場北側付近に移設され、最終的に2010（平成22）年8月に完全に解体撤去されたため、現存していない（柴田 2012）。図8aの写真から判断する限りではおそらく花崗岩と考えられる石材で、3段組の基壇上に旗竿の支柱石が立てられていたようである。旗竿を固定するボルトが2個付属する支柱石の高さは1m32cmで、基壇下から支柱石頂部までの高さが2m83cmあり、表側（北側）に「皇紀二千六百年記念」、裏側（南側）に「昭和十五年十月三十日 西南学院中等部 同商業学校」と刻銘されていたという（西南学院大学広報課 2011）。

**c.** 軍事教練関連施設（消滅）図5●3～9、図7：現在の大学東キャンパス部分にあった旧西南学院中学部の武道場（現法科大学院付近）・運動場（現野球場＝グラウンド・学院本館周辺一帯）周辺は、戦時中の学院内における陸軍配属将校の指揮下で行われた軍国教育・軍事教練の主要な舞台に転用されている。たとえば、図7上3の雨天体操場（現法科大学院南西外側付近）1階のレンガ作りの倉庫部分は、軍事教練で使用される三八式歩兵銃や機関銃を収めた「銃器庫」であった（内海 2003：4頁）。さらには、寄宿舎百道寮北側のバスケットボールコート（籠球場）を改造して、軍事教練用に三方をレンガ塀で隔離して長さ12m・高さ3mの射塚（標的固定用の土盛り）<sup>しやだ</sup>を設けた細長い射撃練習場「狭窄射撃場」（図7下）（現百年館北東部付近）が1934年に建設され

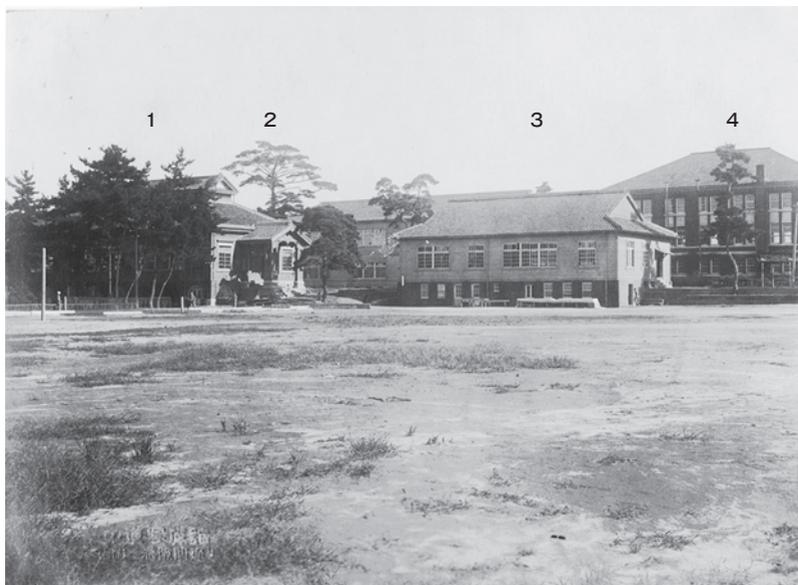


図7 軍事教練関連施設 ※西南学院史資料センター所蔵提供

上：1 武道場，2 松＝防空監視所，3 銃器庫（雨天体操場1階），4 奉安所（本館1階），手前運動場，  
下：狭射撃場

た（西南学院新聞部 1934：2頁，西南学院史企画委員会編 1986：上巻414頁）。また，中学部武道場の南側の中庭にあったひときわ高くまっすぐな松の樹上は「防空監視所」（図7上2）（現法科大学院南側付近）として利用されていたという（内海 2003：5頁）。しかし，いずれも戦後の新制西南学院高等学校の建物建設などに伴い消滅し，直接関連する遺構・遺物の現存は今回確認できなかった。

**d.** 元寇防塁遺構（消滅？）：西南学院旧本館・講堂建物（現大学博物館）の北側で1920（大正9）年に偶然掘り出された鎌倉時代の元寇防塁遺構は，その後学院内で歴史的記念物として保護されていた（伊藤 2017）。しかし，学院側の保護の動機とは別に，幕末・明治維新以後に再編強化された「神風」・「神国」思想と皇国史観の強い影響のもと，戦時下では軍国教育の格好の素材として活用された。「戦時中は蒙古襲来を記念して校内の防塁遺跡の上で，記念式があつて九州大学教授長沼賢海氏の講話，頼山陽の詩の吟詠などが行われていた」（西南学院高等学校40周年記念誌編集委員会編 1989：14頁）という。なお，この防塁遺構は，戦後すぐに学院内の施設配置図等から記載が消滅し，少なくとも現地表からは存在を確認できない（伊藤 2017）。

**e.** 戦時中の新校章（現存）図8b：西南学院の校章をSWA（South-Western Academy）の図案から，1942（昭和17）年9月に三葉の松葉意匠に変更した理由も思想統制に密接に関連する。当時「敵性語」といわれた英語の頭文字を不適当とし，「元寇覆滅の聖地百道原頭を象徴する三葉の松葉」で表現した校章に変更している（西南学院新聞部 1943：1頁，西南学院史企画委員会編 1986：上巻481頁，内海 2008：67頁）。なお，戦時中の西南学院在学生の旧所持品の英語教科書『Chosen Essays for Student Culture』（吉武好孝編1941年・三省堂）で，外聞を恐れて表紙のみ貼り換えて『新訂要註 古事記』（武田祐吉編1933年・三省堂）に偽装されたものを，西南学院史資料センターが所蔵している。



a. 皇紀二千六百年記念国旗掲揚台



b. 陶磁製校章



c. 三菱電機福岡工場事務所（高等学部支南寮）

図8 国旗掲揚台・校章・疎開工場 ※a・c 西南学院史資料センター所蔵提供, b 筆者撮影

#### (4) 経済統制関連

**a.** 陶磁製校章（現存）図8b：1942（昭和17）年9月に三葉の松葉意匠に変更された校章は、思想統制としての性格のみでなく、経済統制の特徴を示す典型的な戦争遺物でもある。日本帝国政府は、1938（昭和13）年に戦争遂行上の理由から経済統制強化の方針を示し、1941（昭和16）年には「金属類回収令」を出した。武器などの素材となりうる市中のあらゆる金属類の回収を開始し、多種多様な器物の陶磁器製「代用品」生産を統制して流通させた（山下編2001，金井 2002）。その結果、それまで金属製であった西南学院の校章の回収・納入と引き換えに、陶磁製代用品の新意匠の校章が渡された（西南学院新聞部 1943，内海 2008：67頁）。現在西南学院史資料センターが所蔵する陶磁製校章は、西南学院中学部と1944年4月に開校した西南学院工業学校のものと考えられる2点である。ともに、表面側の松葉表現部分は赤銅を意識した赤茶褐色の釉薬、その中央部に立体的に表現された「中」・「工」文字部分は白色の釉薬を施釉しているが、裏面側は磁胎そのままの無釉である。タテ・ヨコ3.3cm，厚さ0.8cmで、型作りの白磁製である。なお同意匠の金属製校章もタテ・ヨコの大きさは同じで、厚さのみ約0.2cmとはるかに薄い。

**b.** 疎開工場転用（消滅）図5△1～3，図8c：現在の大学中央キャンパス東半分位置した旧西南学院高等学部は1944年以降の学生の学徒動員により校舎が遊休化したため、第二校舎全部（現4号館南側駐輪場付近）・第四校舎（現新図書館北西側花壇広場付近）の一部と食堂が朝日新聞社西部本社および毎日新聞社工場として貸与された。また、旧高等学部寄宿舎玄南寮（図8c）（現5号館北側付近）は三菱電機福岡工場建設事務所に建物が売却（敷地は貸与）されている（西南学院史企画委員会編 1986：682頁）。いずれの建物も、戦後1950年代以降の大学新校舎建設に伴ってすべて解体されており、現在の学院内に関連遺構・遺物の存在は確認できなかった。

**c.** 松脂採取痕跡（現存）図5▲：構内に戦時下の代替燃料生産を目的とした松脂採取の痕跡をとどめた松が少なくとも10本現生することを確認した。詳細は後述する。

## IV. 構内における戦時下の松脂採取痕跡

### (1) 概 要

西南学院大学構内の景観を特徴づける近世福岡藩政期の「百道松原」に由来する松林は、クロマツ (*Pinus thunbergii*)・アカマツ (*Pinus densiflora*)・アイグロマツ (*Pinus x densi-thunbergii*) から構成される。これらの中に、幹下部の一部に表面の粗皮が剥がれた箇所が見られ、それらが戦時下の松脂採取の痕跡であることが、西南学院高等学校1950年卒業の松井靖之氏により初めて指摘され(松井 2014・2015, 西南学院大学広報課 2014), 九州大学元助教授の井上晋氏(植物学)も同様に確認した(森下 2017)。しかし、学院内の当時の記録類に構内周辺での松脂採取に関する記述は確認できていない。そこで、今回改めて本学院構内とその近接地において松脂採取痕跡のある松の分布状況と特徴に関する調査を行った。その結果、合計10本の松で明確な痕跡を確認できた。

### (2) 戦時下における松脂採取と〈松根油〉

戦前から多様な用途のあるロジン (rosin)・テレピン油 (turpentine oil) の原料として産業化が進んでいた松脂採取は、戦局の悪化に伴う石油輸入の大幅減少の影響を受けて、代替燃料の原料として新たに注目されることになった。そのきっかけは、1944(昭和19)年7月のドイツ駐在海軍武官から軍令部宛のドイツで松から採取した油を戦闘機で使用していることを伝える電報であったという(脇 1989:305頁)。それを受けて海軍に次いで陸軍・農商省・内務省は、特に松の根から採取できる松根油しょうこんゆの増産と軍用機の代替燃料原料にするための技術開発に乗り出したとされる(脇 1989, 石井 2013)。1944(昭和19)年10月に農商省が「松根油等緊急増産措置要綱」,そして1945(昭和20)年3月の閣議決定「松根油等拡充増産対策措置要綱」に基づき、植民地支配下の朝鮮・台湾を含む日本帝国全土の都道府縣市町村の住民総動員で、1945(昭和20)年8月15日まで松根油の原料採取を大幅に急増させることとなった(真

田・本彗 2016, 村山ほか 2016)。なお, 1944 (昭和19) 年10月の各省次官会議で決定された「松根油生産計画実施大綱」によれば, 「松根掘実施部隊は, 市町村長管下の部落会長の下の報国挺身隊」が無償奉仕作業で担当し, 松根原油の生産は地方長官の責任において実施したとされる (脇 1989: 312-313 頁)。そして, 松根抜根作業・乾溜工場建設・技術指導等は, 東北・関東・中国・四国地方を海軍, 東海・北陸・近畿・九州地方を陸軍と, 支援地区を分担していたという (脇 1989: 313頁)。

伐採後10年以上の年月を経た切り株の松の根を掘り出して小割し, 空気を遮断した状態で加熱して乾溜し, 得られた揮発成分を水などで冷やすと木酢液・タールのほかに, 松根粗油 (第一次精油) ができ, さらに蒸留してタールなどを除くと松根油 (松根テレピン油) が完成する。松の幹より採取できる松脂からも蒸留して精製することで松根油と同様のテレピン油が得られる (脇 1989, 真田・本彗 2016, 村山ほか 2016)。詳細な工程を知らされることもなく戦時中に動員されて原料の採取作業にあっていた一般市民は, 両者をあまり区別せずに〈松根油〉と呼んでいたことが多いようである。そして, これらに水素などを添加して第二次精製を行うと, 高オクタン価の航空機燃料用ガソリンができるが, 空襲被災などにより戦争末期の国内でこの工程が可能であった工場は山口県徳山市の第三海軍燃料廠と三重県四日市市の第二海軍燃料廠程度であったとされる (脇 1989, 村山ほか 2016)。

航空機燃料としての実際の松根油使用状況は不明確な部分が多く, ほとんど実用に至らなかったと考えられている (脇 1989)。しかし, 千葉県館山市の館山航空隊で航空機の整備等を担当した元海軍上等兵機関長は, 1945 (昭和20) 年5月頃に「松根油」と書かれたドラム缶の内容物をガソリンと混合し, 戦闘機紫電改などに給油したことを証言している (村山ほか 2016: 37頁)。

### (3) 構内の松脂採取痕跡例

幹下部の一部表面の粗皮が剥がれた松は, 東・中央・西キャンパスに合計20本以上存在する。これらの内, 人為的に粗皮が剥ぎ取られ, 剥き出しになった

表2 西南学院大学構内の松脂採取痕跡例一覧（単位：cm）

登録番号	分類	剥取部 幹回り	剥取部 上端高	剥取部 下端高	剥取部 タテ幅	剥取部 ヨコ幅	剥取部 方位	刻線特徴・本数	刻線間隔
東1号松	B	194	54	13	41	66	南	矢羽状 (左右各4以上)	1
東2号松	A	184	130	94	36	21	東	矢羽状 (左右各15以上)	1~1.5
東3号松	A	207	116	78	38	20	北	矢羽状 (左10以上・右約16)	1~1.5
東4号松	A	196	68	24	44	19	北	上下重複 (下13・上10以上)	0.7~1.5
東5号松	B	240	48	37	11	45	北	矢羽状? (左・縦数本)	1
東6号松	B	217	20	0	20	33	北	矢羽状? (右数本)	不明
中1号松	B	146	52	37	15	24	北	矢羽状? (左数本)	不明
中2号松	B	243	81	60	21	28	南	矢羽状? (右数本)	不明
西1号松	A	171	120	87	33	27	南	左右斜数本, 横数本	0.8 (不明確)
西2号松	A	246	101	61	40	26	北	斜数本・横数本	0.5~2
平均	A	200.8	107	68.8	38.2	22.6			
平均	B	208	51	29.4	21.6	39.2			
平均	全体	204.4	79	49.1	29.9	30.9			

木地部分に鋭い刻線が残る例10本を、確実な松脂採取痕跡のある松として認定した（図5▲東1~6・中1・2・西1・2，表2，図9~16）。粗皮剥ぎ取り面の輪郭形状を基準に，縦長で長方形状（上端と下端が下向きの三角形状の例を含む）の例をA類，横長で下向きの三角形状（ハート形に近い形状例を含む）の例をB類として，2種類に区別した。両者の各部位の計測に基づく

平均値（表2）からは、幹回りや粗皮剥取部の最小・最大幅にはほとんど差異がみられない。しかし、粗皮剥取部最上端の地表高平均値が51cm前後のB類に対して、A類の最下端は68.8cm前後に偏る傾向が確認できる。このことから、A類とB類は、作業段階の違いではなく、松脂採取作業の最初の段階における区別を反映していることがわかる。なお、これらすべての例で、程度の違いはあるが、剥ぎ取られた部分の治癒回復・成長に伴う粗皮再被覆や木地部分の刻線の不鮮明化が進んでいる状況がみられる。したがって、今回認定例に含めなかった表面の粗皮が一部剥がれた松についても、実際には松脂採取が行われていた可能性もある。また、戦後72年間の伐採・枯死例を考慮すると、現在の大学構内全域のかなり多数の松で松脂採取が行われていたことは確実とみられる。

現在の大学付近の街区区画は、戦時中とあまり変化していないため、以下に東・中央・西の各キャンパス別に、松脂採取痕跡のある松の特徴を検討する。なお、中央キャンパスの1例（中1号松）と西キャンパスの2例（西1・2号松）は、1945（昭和20）年の時点では西南学院の校地に隣接する学院外の土地に属していた。

**a.** 東キャンパス（図5▲東1～6，図9～13）：東キャンパス最北端の野球場（グラウンド）北側の松林内に、大学構内でもっとも多数の明確な松脂採取痕跡のある松が集中している。合計6例（東1号松～東6号松）を確認した。人通りも少なく、建物建て替えなどの影響をもっとも受けにくい位置であったことが、これらの松が今日まで残った要因と考えられる。

幹回りは、最大240cm（東5号松）～最小184cm（東2号松）で、2m前後の例が目立つ。表面の粗皮剥取部分の最下端は、地表から0cm（東6号松）～94cm（東2号松）の幅があり、東2・3号松がやや高位置であるが、その他は地表から数十cm以内に収まる。粗皮の剥取面の大きさは、縦長のA類は最大例タテ44cm・ヨコ19cm（東4号松）、最小例タテ36cm・ヨコ21cm（東2号松）であるが、東4号松は特にヨコ方向に粗皮の治癒再被覆状況がみられ、本来は40cm近くのヨコ幅があった可能性がある。粗皮剥取部分の方位は、北向

き（東3～6号松）、南向き（東1号松）、東向き（東2号松）の3種類がある。

木地部分の刻線は、東1～3号松のように左右で異なる方向の斜めの刻線列が下向きの矢羽状に構成されたものが基本と考えられるが、東4号松のように上段の右上がり斜めの刻線列が下段の左上がり斜めの刻線列に重複した例もある。また、東5号松は剥取部左側に左上がり斜めと縦方向の刻線数本、東6号松は剥取部右側に右上がり斜めの刻線数本が現在かろうじて確認できるが、本来の全体の構成は不明である。ある程度全体像が確認できる例での刻線の本数は、松脂採取終了後の治癒回復や滲出した樹液の固着によって正確に判別するのは困難であるが、東1号松は左右各4本以上、東2号松は左右各15本以上、東3号松は左10本以上・右約16本、東4号松は下段約13本・上段約10本である。刻線の幅はいずれも1mm以下で、平行する刻線の間隔もおおむね1cm前後で共通する。

**b.** 中央キャンパス（図5▲中1・2、図14・15）：大学4号館南側の駐輪場北側と学術研究所西端南側で、合計2例（中1・2号松）のみを確認した。戦後の大学校舎建築や建て替えなどの環境変化に伴い、松脂採取が行われた松の多くは、すでに伐採・枯死したものと推定される。

幹回りは、中1号松が146cmで今回西南学院大学構内において確認した松脂採取痕跡のある松としては最小で、中2号松は243cmである。表面の粗皮剥取部分の最下端は、中1号松が地表から37cm、中2号松が60cmである。粗皮剥取部分の形状は、ともに横長のB類で、中1号松はタテ15cm・ヨコ24cm、中2号松はタテ21cm・ヨコ28cmであるが、すでに粗皮の治癒再被覆がかなり進んだ状態と考えられる。粗皮剥取部分の方位は、中1号松が北向き、中2号松が南向きである。

木地部分の刻線は、どちらも不鮮明で、中1号松は粗皮剥取部分左側に左上がり斜めの刻線を数本、中2号松は粗皮剥取部分右側に右上がり斜めの刻線数本の痕跡をかろうじて確認できる。本来は下向きの矢羽状に構成された刻線列の残存と考えられる。刻線の幅はどちらも1mm以下で、平行する刻線の間隔は欠落箇所が多く判然としない。



図9 東1号松 ※筆者撮影

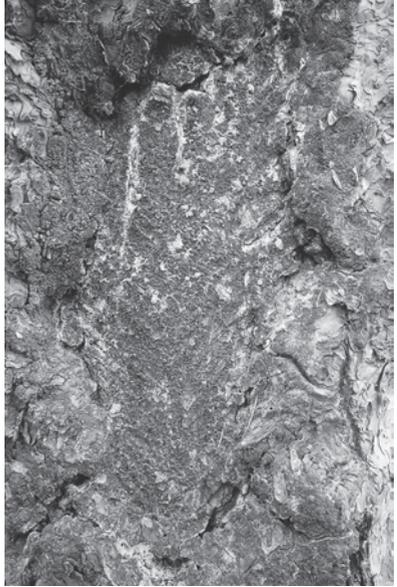


图10 東2・3号松 ※筆者撮影

上左(右:東2号·左:東3号), 上右:東2号, 下:東3号



図11 東4号松 ※筆者撮影

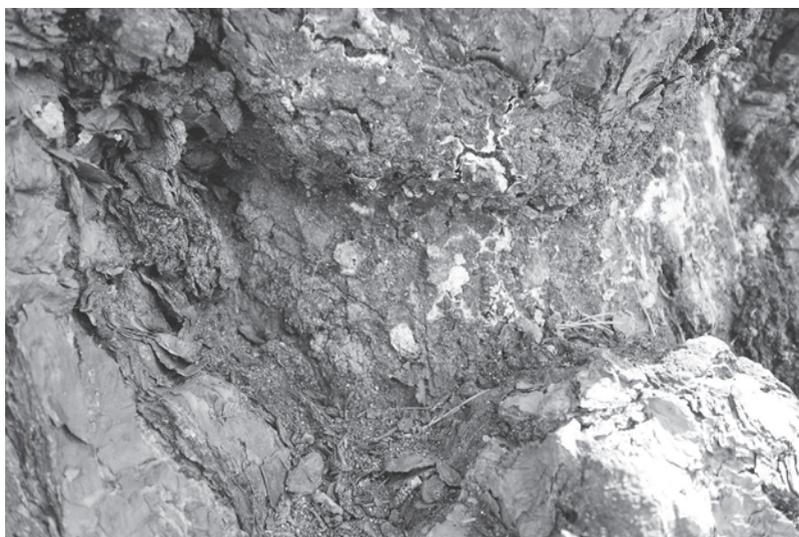


図12 東5号松 ※筆者撮影



図13 東6号松 ※筆者撮影



图14 中1号松 ※笔者摄影



図15 中2号松 ※筆者撮影



图16 西1・2号松 ※筆者撮影  
上：西1号，下：西2号

c. 西キャンパス周辺 (図5▲西1・2, 図16) : 弓道場西側の松林と国史跡西新元寇防塁指定地内で, 合計2例 (西1・2号松) のみを確認した。幹回りには, 西1号松が171cm, 西2号松は246cmで今回西南学院大学構内周辺において確認した松脂採取痕跡のある松としては最大である。表面の粗皮剥取部分の最下端は, 西1号松が地表から87cm, 西2号松が61cmである。粗皮剥取部分の形状は, とともに縦長のA類で, 西1号松はタテ33cm・ヨコ27cm, 西2号松はタテ40cm・ヨコ26cmである。どちらもヨコ方向の粗皮の治癒再被覆が進んでいる。粗皮剥取部分の方位は, 西1号松が南向き, 西2号松が北向きである。

木地部分の刻線は, どちらもやや不明確であるが, 東・中央キャンパスと異なる特徴がみられる。西1号松は左上がり斜めと右上がり斜めの刻線各数本の中間に横方向の刻線を数本はさむ。西2号松は短く太めの刻線が斜め・横方向などとかなり不規則である。刻線の幅は西1号松が1mm以下で東・中央キャンパス例と同様であるが, 西2号松は数mmと幅広である。刻線の間隔は欠落箇所が多く, また西2号松は不規則なため判然としない。

## V. 考 察

アジア太平洋戦争期の戦争遺跡 (遺構・遺物) について, 日本帝国期の全体主義 (軍国主義) 景観を構成する物質文化要素として再規定し, 戦闘関連・軍事統制関連・思想統制関連・経済統制関連の4項目の新たな分類案を提示した。そして, その新分類に基づいて西南学院大学構内の戦争遺跡を調査した結果, すでに消滅したものや計画段階で実施されなかった例も含めると, この4項目すべてに関連する事例を確認できた。戦時中の西南学院を組み込んでいた全体主義景観は, 思想・人・施設・松林などのすべてを効率的に戦場へと導く連動的な過程と結果であったといえる。ここでは, 今回特に重点的に調査を行った戦時下の松脂採取痕跡の解釈と今後の課題に関して考察する。

## (1) 松脂採取痕跡の解釈

現在までに戦争遺跡としての〈松根油〉採取痕跡の調査研究が進んでいるのは、長野県上田・小県地域（村山ほか 2016）と滋賀県栗東市（真田・本夢 2016）が代表的である<sup>3)</sup>。また、福岡県内では福岡市西区生の松原の九州大学演習林内に、2009年時点で松脂採取痕跡のある松が28本存在したことが報告されている（井上 2009）。いずれの研究でも、松の根の掘り出し痕跡例は確認が難しく、松脂採取痕跡がある松の現存例と分布状況の把握がおもに進められている。そして、戦時中の作業実態の解明は、敗戦直後の日本帝国政府・軍の命令による文書記録焼却などの影響で行政史料類の残存例が乏しいため、戦時中の実際の作業経験者からの聞き取り調査成果が大きな部分を占めている。

松の根の掘り出しは重労働で、体力のある男性の多くが戦場に動員されていた戦争末期には、国民学校児童・女性・老人でも採取が容易な松脂採取が、しだいに〈松根油〉原料獲得作業の主対象になったとみられる（真田・本夢 2016）<sup>4)</sup>。また、そこで採用された技術は、戦前に産業化されていた松脂採取方法をほぼそのまま採用したようである。

戦前に産業化されていた一般的な松脂の採取方法は、鋸でV字形に斜めの溝を切付ける斜溝式（鋸式）採取法であった。図17は、斜溝式を中心とした各種松脂採取方法の模式図（松尾・多賀編 1977）である。また、図18は、松脂採取に必要なおもな道具類（千葉県編 1935）である。いくつかの当時の手引書（千葉県編 1935、合資会社荒川商店編 1942）によると、細部の違いはあるが、おおよそ以下のような作業手順で行われている。

①最初に、地上から高さ7寸（約21cm）から4・5尺（約121cm～151cm）の範囲内で幹表面（幹回りの2分の1～3分の2の範囲内）の粗皮剥を、亜皮部の組織を傷つけない程度に行う。粗皮が湿気を含んで柔らかい雨天や梅雨に作業を行うのが良いという。なお、老木でないアカマツは、表面の粗皮剥は不要である。幹の太さにより異なるが、熟練者は1日で40～60本程度の粗皮剥が可能とされる。②松脂採取のためのV字形の斜溝（刻線）の切付け予定位置を白墨などで記しておく。そして、6月中旬頃から10月中旬頃まで、特に7・8・

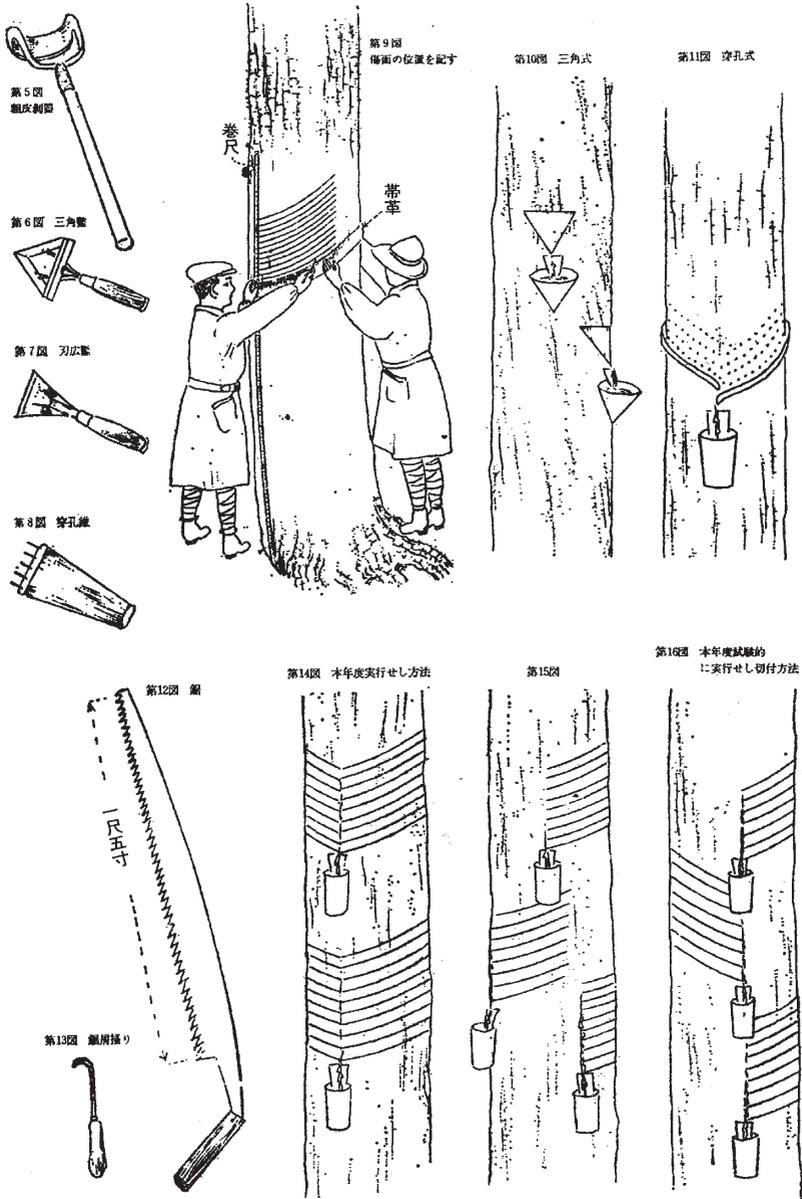
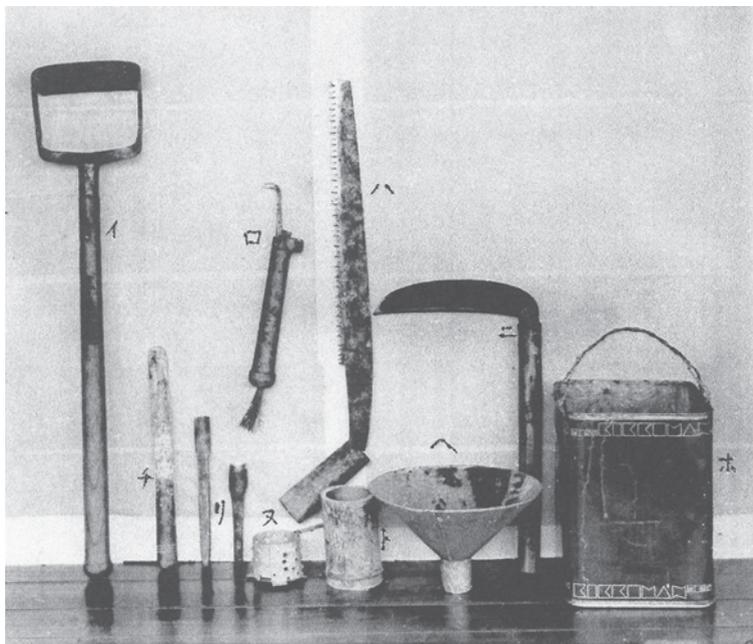


図17 松脂のおもな採取方法 出典：(松尾・多賀編 1977)



具器用取採脂松

イ、粗皮剥  
ロ、溝搔  
ハ、鋸  
ニ、鎌  
ホ、石油鏝  
ハ、漏斗  
ト、受器(竹筒)  
チ、笥  
リ、鑿  
ヌ、ハンド取り

図18 松脂採取に使用する道具類 出典：(千葉県編 1935)

9月が松脂採取の最適な時季となる。③最初に地上に近い高さ7寸(約21cm)ほどの位置に鋸の刃先を幹表面に対して垂直にあて、45度位の角度の斜溝をV字形に丁寧に深さ2~3mmほど1本切付け、溝搔きで溝内の鋸屑を速やかに除去する。④V字形の斜溝の真下に竹筒または空缶などの滲出した松脂を受け止める容器を設置固定する。斜溝と容器の間は、小さなブリキまたは硬質の紙片で樋状につなぐ。⑤1本目のV字斜溝から松脂の滲出が収まる翌日以降に、

下部のV字斜溝に平行してその上部に新たにV字斜溝を1本切付けることを繰り返す。上下の溝の間隔は、5分(約1.5cm)あるいは1寸(約3cm)ほど(千葉県編 1935)、またはできるだけ狭く0.5~0.6cm間隔(合資会社荒川商店編 1942)と、手引書によって異なる。

松脂中の揮発性物質の消失を防ぐため、この1回のV字斜溝ごとに松脂を回収し、石油の空缶などに入れて密閉して保存する。そして、切付けた斜溝が10~15本目になる頃、松脂の滲出量も最大量となり、松脂受けの容器も上方に移動させることが必要となる。

これらを踏まえると、西南学院大学構内で今回確認できた松脂採取痕跡では、東キャンパスの東2・3号松が同時代の手引書に比較的忠実な例とみられるが、その他の例についてはやや異なる特徴が目立つ。たとえば、滋賀県栗東市の事例は、写真から判断する限り今回の分類の縦長のA類に相当する事例が中心で、表面の粗皮剥取部分の大きさは30~40cm×60cmほどの例が多いとされる(真田・本寿 2016:23頁)。また、福岡市西区生の松原では、A類に相当する事例で、20~30cm×50~100cmであったという(井上 2009)。西南学院大学構内例でこれらと大きさが近似するのは、横長のB類に属する東1号松程度である。西南学院大学構内例のA類は、粗皮剥取部分の大きさの平均値がタテ幅38.2cm×ヨコ幅22.6cm(表2)で、滋賀県・西区生の松原例やおそらく長野県の事例に比べても明らかに小さい。これは、西南学院大学構内で行われた松脂採取期間が、他地域に比べてより短期間で終了したことを意味しているといえる。なお、今回確認したB類は、他地域での明確な類例を確認することができなかった。また、木地部分のV字状の刻線(斜溝)も、東2・3号松を除くと、手引書や長野県・滋賀県例の大半に比べて、浅く・不揃いで本数も少ない例が目立つ。また、下段の刻線列の上段に向きの異なる刻線列を重複させた東4号松の例は、滲出した松脂が目詰まりを起こして不規則に流れ出し、効率的な回収が困難であったはずである。これらは、西南学院大学構内での松脂採取作業の従事者中に技術的熟練者はわずかで、普段農林業に従事していない市街地住民が不十分で簡単な技術指導のみで作業にあたったことか、あるいは

は形式的にだけ松脂採取作業を実施した状況に関わる可能性がある。

以上の点を総合すると、西南学院大学構内の松脂採取痕跡を残した松は、当時の西南学院の了承・協力のもと、動員された西新・百道地区の国民学校児童・女性・老人が中心となり、1944（昭和19）年10月～1945（昭和20）年8月15日までの間の限られた数箇月程度の短期間に、学院周辺一帯で行われた松脂採取・松根油原料採取作業の結果形成されたものと考えられる。西南学院大学構内での松脂採取作業経験者の証言を今回得ることはできなかったが、西南学院大学構内の松脂採取について初めて指摘した松井靖之氏や、おそらく福岡市内での松脂採取を目撃した石橋幸子氏の記事では、1944（昭和19）年頃のことと指摘している（松井 2014, 西南学院大学広報課 2014, 石橋 2017）。中央での松根油増産に関する各種決定が同年10月に行われているので、その翌月以降の冬季に松脂採取が開始されたとすると、松脂の採取にあまり向かない季節に作業を実施していたことになる。

なお、福岡県内や九州各県での戦争遺跡としての松脂採取痕跡をもつ松に関する調査はまだほとんど着手されていないが、長崎県島原市での戦時中の松脂採取体験談（瀬野 1996）なども知られており、今後の調査研究によってさらに多くの事例が確認されるものと考えられる。

## (2) 保存と活用に関する課題

福岡市内に現存し地表から容易に目視確認できる戦争遺跡はあまり多くない（川口・首藤 2010, 伊藤 2016）。そうした中で、福岡市内の交通の利便性の良い本学院構内の松脂採取痕跡に代表される戦争遺跡は、アジア太平洋戦争期の西南学院の歴史の生き証人であるばかりでなく、その形成過程にも深く関連する地域自体にとっても価値の高い貴重な歴史的文化財といえる。今後は、これらの松の養生・保護を前提に、地域の平和教育・学校教育・生涯学習活動の際に、積極的な公開活用が行われることが望まれる。また、生命体の必然の将来課題として、今後枯死・倒壊などの事態の際には、特に松脂採取痕跡が明瞭で良く特徴を知ることができる東キャンパスの東1～4号松については、松

脂採取のための粗皮剥取部分全体を切り出して、保存処理を行ったうえで、学術資料として展示活用が行われることも望まれる。

## 謝 辞

本稿を執筆するにあたり、西南学院高等学校卒業生柁井（松井）靖之氏、九州大学元助教授井上晋氏、西南学院史資料センター篠田裕俊氏・世戸口尚英氏・高松千博氏、西南学院大学博物館学芸員内島美奈子氏、西南学院大学広報課前田誠史氏、西南学院施設課宮崎太一氏、西南学院大学大学院秋田雄也氏より、懇切なご教示と各種資料を提供して頂き、また今回の調査にご協力を賜りました。末筆ながらお名前を記して御礼を申し上げます。

## 註

1) 現在の国内外における「歴史修正主義」の動向に関する代表的な研究事例を紹介する。国外では、ナチス政権による民族絶滅政策（Holocaust）に関する学術的研究成果が、長年「歴史修正主義」による史実歪曲・抹消の標的になっている。それらに関する歴史学・科学の立場からの代表的な概説的文献として以下をあげる。

Bastian, Till 1997 *Auschwitz und die "Auschwitz-Lüge"*, Verlag C. H. Beck oHG (München) [石田勇治・星乃治彦・芝野由和編訳 2005 『アウシュヴィッツと〈アウシュヴィッツの嘘〉』, 白水Uブックス 1080, 白水社（東京）]

Lipstadt, Deborah E. 1993 *Denying the Holocaust*, The Free Press (New York) [滝川義人訳 1995 『ホロコーストの真実：大量虐殺否定者たちの嘘ともくろみ』 上下巻, 恒友出版（東京）]

Lipstadt, Deborah E. 2005 *Denial: Holocaust History on Trial*, Ecco (New York) [山本やよい訳 2017 『否定と肯定：ホロコーストの真実をめぐる闘い』, 株式会社ハーバーコリンズジャパン（東京）]

Shermer, Michael 1997 *Why People Believe Weird Things: Pseudoscience, Superstition, and Other Confusion of Our Time*, Brockman Inc. [岡田靖史訳 2003 『なぜ人はニセ科学を信じるのか：歪曲をたくらむ人々』 II, ハヤカワ文庫 NF281, 早川書房（東京）]

国内では、アジア太平洋戦争中の日本軍による南京虐殺事件・従軍慰安婦・沖縄での住民「集団自決」に関する歴史学の学術的研究成果が、産経新聞社による「歴史戦」や日本会議とその自由民主党（安倍晋三総裁）などの関連議員・宗教団体の主要な攻撃対象になっている。さらに最近では、関東大震災時の朝鮮人虐殺やアイヌ民族の存在についても同様の標的に加えられた。それらに関する主に歴史学の立場からの代表的な概説的文献と

して以下をあげる。

南京虐殺事件：

笠原十九司 1997『南京事件』, 岩波新書新赤版 530, 岩波書店 (東京)

笠原十九司 2007『南京事件論争史』, 平凡社新書 403, 平凡社 (東京)

笠原十九司・吉田裕 2006『現代歴史学と南京事件』, 柏書房 (東京)

従軍慰安婦：

吉見義明 1995『従軍慰安婦』, 岩波新書新赤版 384, 岩波書店 (東京)

吉見義明 2010『日本軍「慰安婦」制度とは何か』, 岩波ブックレット No.784, 岩波書店 (東京)

山口智美・熊川元一・モーリス＝スズキ＝テッサ・小山エミ 2016『海を渡る「慰安婦」問題：右派の「歴史戦」を問う』, 岩波書店 (東京)

沖縄住民「集団自決」：

林 博史 2001『沖縄戦と民衆』, 大月書店 (東京)

林 博史 2009『沖縄戦強制された「集団自決」』, 歴史文化ライブラリー 275, 吉川弘文館 (東京)

歴史修正主義団体の社会的調査：

小熊英二・上野陽子 2003『《癒し》のナショナリズム：草の根保守運動の実証研究』, 慶應義塾大学出版会 (東京)

関東大震災時の朝鮮人虐殺：

加藤直樹 2014『九月、東京の路上で：1923年関東大震災ジェノサイドの残響』, ころから (東京)

アイヌ民族：

岡和田晃・マーク＝ウィンチェスター編 2015『アイヌ民族否定論に抗する』, 河出書房新社 (東京)

- 2) 同時代の福岡県でも、戦後の日本国憲法につながる理念に基づいた軍国主義への根強い抵抗が存在した。1932 (昭和 7) 年の 5.15 事件を契機とする軍部の台頭と圧力を強く批判しファシズムの危険性と民主制の尊重を主張した福岡日日新聞 (現西日本新聞) の菊竹六鼓 (菊竹淳) (前田 1964, 木村 1975) や、中国への侵略戦争反対・撤兵と植民地解放を呼びかけ 1933 (昭和 8) 年 2 月 11 日に福岡警察署 (現福岡中央警察署) で拷問死した西田信春を筆頭に同日一斉検挙された福岡県の日本共産党関係者 323 名 (堺 2009) などが代表的である。なお、西南学院出身の中村哲医師の父である中村勉も、日本労働組合全国協議会での反戦・労働運動などを理由に 1932 (昭和 7) 年 2 月 24 日に検挙起訴されている (堺 2009: 105 頁)。また、1940 (昭和 15) 年 9 月 24 日に福岡県公会堂 (一部現存) で開催された極右団体興亜青年連盟協会主催の「キリスト教撲滅演説会」で、西南学院高等学部学生平田正人ほか 6 名または約 20 名が抗議の声をあげ警察に検挙拘束されたが (和田・佐々木 1966: 176-177 頁, 西南学院史企画委員会編 1986: 上巻 475 頁, 杉本・大野 1960: 大野 4 頁), 波多野培根教授は「この日本の大事な時、又西南にとって

も大事な時にあの演説会でとった君達の行動は立派であった」(内海 2008: 63 頁)と学生達を擁護したとされる。

- 3) 海外での戦争遺跡の一種としての現生樹木加工痕跡例としては、たとえば連合王国(イギリス)南イングランド地方における第一次・第二次世界大戦期の演習中の兵士により生木の樹幹に刻まれた絵画・記号類(Arborglyph)の研究例(Summerfield 2012)もある。
- 4) 福岡市内における戦時中の松の根採掘については、当時旧制西南学院中学部1年生だった松井靖之氏が現在の城南区友泉亭公園の丘で動員作業に従事していたことを証言している(松井 2014=図1中段, 西南学院大学広報課 2014=図1上段)。西南学院大学構内においても同様に松の根採掘が行われた可能性が十分に考えられるが、その痕跡などは今回確認できなかった。

### 引用・参考文献

- 石井正紀 2013『陸軍燃料廠：太平洋戦争を支えた石油技術者たちの戦い』, NF文庫 N381, 潮書房光人社(東京)
- 石橋幸子 2017「戦闘機の燃料 松やにで代替」, 『西日本新聞』2017年7月28日朝刊: 9頁(こだま欄), 西日本新聞社(福岡)
- 伊藤慎二 1986「現代史と考古学」, 『考古学研究』33巻1号: 32-37頁, 考古学研究会(岡山)
- 伊藤慎二 1989「再び現代史と考古学について」, 『考古学研究』35巻4号: 33-35頁, 考古学研究会(岡山)
- 伊藤慎二 2016「福岡市中央区薬院の戦争遺跡：陸軍振武寮とその周辺」, 『国際文化論集』第30巻第2号: 35-64頁, 西南学院大学学術研究所(福岡)
- 伊藤慎二 2017「西南学院大学構内のもうひとつの元寇防塁遺構：大学博物館北側の元寇防塁」, 『国際文化論集』第31巻第2号: 121-144頁, 西南学院大学学術研究所(福岡)
- 井上 晋 2009「植物と人・生きもの達③：福岡市・生ノ松原の松脂採取と松根油精製」, 『ふるさとの自然と歴史』第330号(2009年9月号): 4-5頁・裏表紙, 社団法人歴史と自然をまもる会(福岡)
- 内海敬三 2003『遙けき道：振り返る60年の道』, 私家版小冊子(福岡)
- 内海敬三 2008「西南学院とアジア・太平洋戦争」, 『西南学院史紀要』Vol.3: 61-72頁, 学校法人西南学院(福岡)
- 金井安子 2002「日用品・代用品」, 『しらべる戦争遺跡の事典』: 349-354頁, 柏書房(東京)
- 川口勝彦・首藤卓茂 2010『福岡の戦争遺跡を歩く』, 海鳥社(福岡)
- 木村栄文編 1975『六鼓菊竹淳：論説・手記・評伝』, 葦書房(福岡)
- 合資会社荒川商店編 1942『再版 松脂の話』, 合資会社荒川商店(大阪)
- 堺 弘毅 2009『隠された光：わが郷土の民主平和の先達たち』, 治安維持法犠牲者国家賠

- 償要求同盟福岡県本部（福岡）
- 真田善之・本郷桂 2016「栗東地域に残る戦争遺跡：松根油・松脂採取の痕跡調査から」、『栗東歴史民俗博物館紀要』第22号：16-24頁，栗東歴史民俗博物館（滋賀）
- 柴田道明 2012「さらば西新校舎：西南学院高校の忘れがたき思い出」、『西南学院史紀要』Vol.7：39-47頁，学校法人西南学院（福岡）
- 十菱駿武・菊池実編 2002・2003『しらべる戦争遺跡の事典』正・続，柏書房（東京）
- 杉本勝次・大野寛一郎 1960『福岡地方における民主主義の基盤と発展：キリスト教主義学校と教会を中心として』（福岡地方における民主主義思想の生成と発展についての調査及び研究資料第4），出版元不明（福岡）
- 西南学院史企画委員会編 1986『西南学院七十年史』上下巻，学校法人西南学院（福岡）
- 西南学院新聞部 1934「狭窄射撃場」、『西南学院新聞』第6号：2頁，西南学院新聞部（福岡）
- 西南学院新聞部 1943「逞しき意欲の表現 新しき時代の学院：紀元節から新校章着用」、『西南学院新聞』第55号：1頁，西南学院新聞部（福岡）
- 西南学院大学広報課 2011「皇紀2600年記念の国旗掲揚台」、『Seinan Spirit』No.178：18頁，西南学院大学（福岡）
- 西南学院大学広報課 2014「キャンパスにある松脂採取の痕」、『Seinan Spirit』No.191：21頁，西南学院大学（福岡）=図1上段
- 瀬野精一郎 1996「航空機補助燃料松脂の採取」、『日本歴史』第581号：56-59頁，吉川弘文館（東京）
- 千葉県編 1935『松脂採取のすすめ：附県有林内松脂採取成績』，千葉県（千葉）
- 当真嗣一 1984「戦跡考古学のすすめ」、『南島考古だより』第30号：2頁，沖縄考古学会（沖縄）
- 当真嗣一 2015『沖縄近・現代の考古学』，琉球書房（沖縄）
- 長谷川町子 1979『サザエさんうちあけ話』，姉妹社（東京）
- 林 省三 1952『松脂の採り方とその知識』，林野庁指導部研究普及課（東京）
- 前田雄二 1964『剣よりも強し：菊竹六鼓の生涯』，時事通信社（東京）
- 松井靖之 2014「松根油採取 松林の保存を」、『西日本新聞』2014年9月12日朝刊（こだま欄）：9頁，西日本新聞社（福岡）=図1中段
- 松井靖之 2015「松の大木枯死 シンボル樹に」、『西日本新聞』2015年7月31日朝刊（こだま欄）：9頁，西日本新聞社（福岡）=図1下段
- 松尾郁太郎・多賀玄太郎編 1977『荒川林産百年史：松脂と共に』，荒川林産化学工業株式会社（大阪）
- 松見俊ほか 2016『西南よ，キリストに忠実なれ 西南学院創立百周年に当たっての平和宣言：西南学院の戦争責任・戦後責任の告白を踏まえて』，「西南学院の戦争責任・戦後責任の告白（案）」作業部会編，学校法人西南学院（福岡）
- 村山隆・手塚正道・桂木恵 2016『戦争遺跡 松の木は語る』，上田小県近現代史研究会

- ブックレット No.24, ヤマンバの会, 上田小県近現代史研究会 (長野)
- 森下公貴 2017 「戦争語る松後世に: 西南学院大キャンパス保存検討: 20 本松やに採取の傷」, 『西日本新聞』2017 年 8 月 16 日朝刊: 27 頁, 西日本新聞社 (福岡)
- 山下峰司編 2001 『〈代用品〉としてのやきもの』, 瀬戸市歴史民俗資料館 (愛知)
- 脇 英夫 1989 「第三編 第二章 三燃最後の生産物・松根油」, 『徳山海軍燃料廠史』(徳山大学研究叢書 7 号): 304-328 頁, 徳山大学総合経済研究所 (山口)
- 和田洋一・佐々木敏二 1966 「昭和 15 年におけるキリスト教運動: 内務省警保局『社会運動の状況』による」, 『キリスト教社会問題研究』第 10 号: 155-193 頁, 同志社大学人文科学研究所 (京都)
- Ferlini, Roxana ed. 2007 *Forensic Archaeology and Human Rights Violations*, Charles C Thomas Publisher (Springfield)
- Funari, Pedro., Zarankin, Andrés and Melisa Salerno eds. 2010 *Memories from Darkness: Archaeology of Repression and Resistance in Latin America*, Springer (New York)
- Myers, Adrian and Gabriel Moshenska eds. 2011 *Archaeologies of Internment*, Springer (New York)
- Schofield, John 2009 *Aftermath: Readings in the Archaeology of Recent Conflict*, Springer (New York)
- Sturdy Colls, Caroline 2012 Holocaust Archaeology: Archaeological Approaches to Landscapes of Nazi Genocide and Persecution, *Journal of Conflict Archaeology* Vol. 7(2): pp. 70-104, Maney Publishing (Leeds)
- Sturdy Colls, Caroline 2015 *Holocaust Archaeologies: Approaches and Future Directions*, Springer (Cham)
- Summerfield, Chantel 2012 Trees as a Living Museum: Arborglyphs and Conflict on Salisbury Plain, In Saunders, N. J. ed. *Beyond the Dead Horizon: Studies in Modern Conflict Archaeology*, pp. 159-171, Oxbow Books (Oxford and Oakville)